国立国会図書館　　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用

両個女児郭花笠初編巻之中

江戸　松亭金水編次

第三回　過去の説話

さて武蔵の国豊島の郡。砧川の庄傍に。猪俣平次と
いふ人あり。さて恩田家の郎等にて。五十石ありを領し。
富にもあらねと貧しからぜ。人なみ〳〵に世代送る。妻
のお邑と二人が中に。両個の女児を持てり々り。姉の阿
千代は十七才。妹阿滅は十五才。いづれも劣らぬ眉目容

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

桃と桜紙浩蕩に。おらべて遊ぶる紅地しつ。夫婦が寝
雲渉らぬ。琴と絵を始めとして。女子の手業を一
教ゆるに。婦は殊さら器用ゆく。一を覚てハ十紙知る。
怜悧生まるりけまべ。人毎嘆して。猪俣平次は
似りもの。過世いかなる果敷ゆく。世にも稀なる児を持
ちて義しさといひあへり。かゝまにけまべ近きあたりの
翁官ぞりハ意志をひて。使紙のもあさ多ぐにぴひよる
人も多けれど。阿千代ハ貞しき生れにて親の許さね

嬉奉るハ。笑もあかく稼ハしと。いとさびしくも言放つに。
いつハ絵ゆる族もあまべ。貞しき紙にいとゞ。大す紙おと
がまに。況人もあれど。さらにうけ知く風情も見せぬ。
こゞ明くまに父母に仕え。姉に物紙教へあどして。意
だかりも仇めきたる。るのあけまべ登方なく男婦の
の馬麻娘と。今年紛まの恐まれにも。あへての人の情
あるべし。かくて平次が同僚に。神宗佐五七といふ人あり。
是が次男に夫々昂さて。今年十九の翁官なるが。性来

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

篤実温順にて。こゞ是間に身を秀孫明望書物
に眼をさらして。怠ると此のありしが年に似げなく
上達し。此処等渋りに並びなき。弱官にてありしが
平次も書物を好むにより。眼ある日は往かひて。平次に
教えを受る日もあり。されば平次は矢部が忘しを
志ひつゝ。ゴが児のごとく心思ひ似して。いと信切を尽し
しるが。或日女児は勢ぢに出て。尚ほ妻に向ひ
「かゝてそなたにも御詫しておく矢部が生立ちは。あかく

今ぞ此の若いものには。恐らしい生まろ此。いよく程とお
詫きめて。養子に貰ひ入りの「ぜいぶん子ならよう
らうとぞんじまん。先でさへ兼知なら「実は此ごろ聞て
ゐたが。信ぬ七も欲こんで。どうぞお詫きめたいとのる。尚
人も志ゆうちの振る「そんなら下女よふございまたは
「よさへいゝが困つたは女児どものうゝ。欲ものいたばに妹
へ。養子をさると成てしまう。阿千代が何とろ思ふでもらう。
これもまた今の女児供にはめづらしい性質かゝぐおれか

後のうちでハ。阿子代をさんへお惣る。所を見ゑて片
づけて。夫から后に聟をさまバ。何ゆもいたゞだんまりで。
まむといふもの。まさろ血脈のお洲をおんて。婦へ聟をさる
も異なるもの。といふて阿子代が片づけをいたまでも
も居るまでも標致なり。如ぞて。女のゑ業に丕見ハない
ゑ。何処へでもゆらうといふたら。世ひ人ハいくらも
が。如何と二人の女兒のゑ。どふぞ来く按トのない所へ娘
よくまたいと。そへバ長し短うしで。サテどふも思いおさのへ

さゆうサ何もこゑ縁だく。どふも見もいけやらうかい
たゞ先の見へあいコけ。まさ夫々平代世のふと。おぼしかん
なら世ともたやく。おさらどハ来りまもまい近所でも
こゑ評判の。おさるしい美いもの。人に先代頼さまでハ残
祝んでござりまも。「そうさく。史てゆれもサテいろ〳〵
仏祀するのサ。ハテどふしたらト胸にゑをおさ。要時思
按したりしが。信と仏代神宝あて。「何でも冬希ハ
お洲が聟さ。其処で阿子代にハおまがよく。入とけを

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

言て笑そう。愛ゆる生まつき。気紙悪くまるるで
もわるまん「ぶふして おまへさん。気を悪くまるどころ
でございませう。仮を笑こう おまへさんや私を程くめり
ぞてゆゆやア ありません「ぞよしく何るのも三日
ゆる。そんなら夫よト 遷合まむ。打ちかへる二人の女児
ハイこで今と父母の。お人 出ぬ平沢ハ完爾「そけふハ早
かつてる。コレ お沢。おねしハ今から母さ友と明神さまへ
参つて来ませ。毎月の十五日ハ。参詣かしこるハ

出ハが。今日ハいろく用が多くて。ぶふも往ませそうも
ない。代条がそら情をまたいひて お邑に同じ志ませ
まべ。知得果て支度をいそがし。母ハ お沢を伴なひて
所の清雪明神へ。参詣せんと出ぬ。平沢ハ二人を
出しまり。婦女児の阿子代をまるまき「コレ おちよとの春
芝居人往こしとき。財布の幕で。之義がいふせり 仮紙
おねしハ おぞくて居るう「ハイ おぞくてをりまけ 平「ありやア
何と言ひけの「そや お爺さんハおしなる紙おこづ孫

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

おまへさんにも　手「イヤサ　そのせつなさつこそ。さらぐる因縁
むすめーがあるうへさ　ちよ「ありさへ草で頃でござゐまするへ
手「ありさへむ一しやべ長き孝の事わかる嫌つゆゑ
おもわすのサ　ちよ「そんならお手軽一狂言ぞ一まする　手「兄弟の
せりふがそう一の序びらき勿論曽我家の敵切かこで。
親へあけまど兄へそぞろ。今よう成長なさつたるアと。
兄弟たる孫様が兄弟をてらい所狂言ござと召べ
狂言ぢや実へ浮世ふよそまわるのぞずでふ事がら上の

曽我兄弟では無いけれども。親へなくて兄へ育て見や
ちよ「おや五郎さんとてきますがそのかゆでござゐまするへ
なぜまたそれが私の身のうへでござゐまするへ　手「親へなく
ても十七まで育ちといふ人は有りのサ　ちよ「何でうさ
おりあひますせん。なぜ親がないと思ふて居りまするへ私の親
へ先きへえと。おかくれさんではござゐませんか　手「それが思ふ了
親もござゐ。親をあらね親を親ともせん子で居りますね子をも
子とおもはんへ。勘当ありて親子の縁ぜんつ隔てねえ

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用

身とハ。おゆりてハ居ましど桃の本の。羞へ接木の梅の
ちる。色も香もよ死親まさり。えらぶに咲て花女児も。
接木の不肖に親と児の。名ハありながら此家紙。法ゲ
するるもなるねといふ。どまも一ツの因果の始まり。ヘヤ
あんとおつ志ゆんまん。私ハアカ爺さんや。おかゝさんの子で
ハどざいませんえ。ヘイヤサそのゆうに鬱くるハなりけん。
どのぞ茶なるそのるを。いけそ言いで仕まひたいと。
見まで知を犯つてゞ。いまで恨ハね特宜となり。今

改てめていふて吹きと。実ハおねしハおまゆも母にも。血
肉紙にけて児でハ無い。どひ出せバ十四年。志ゆも夏ゲ月
始めごろ。智しハ一体弱ずきで。障さへ知ましバ朝夕ちら
つて。沖弱ゆゝ岡弱ゆゝ。所も定めぼ歩行まり。史を
たのしこと志ゆ。志ゆ見ハてうど行徒人岡弱にゆゝ筆
の義うげ。児のなく夢をゆゆくこて。立ちより子ましバ祖に
清しい。板の柄目に括しつけ。浮て居る稚児一人かしい
そうゆと抱かゝし。彼にあけて極飯をくいせ。編し脇

して宅をきて。却よりと親父の所名でも。そつて居るなら
手がアと。尋ねて見てもさつぱり分らぬ。口は利ても片
言の。そくさんあけちといふ事。手がりとあるのもなし
何も損なれ紛もしまへ。生れた当座の程見なら世間に
いくらもあるならひ。この位にまでも成仲し。ぞうしと
見けで損ならずよく見るに目鼻ぞち。賤しからざる女の児。
宅にもお渋は二果の覚。まことまと人連て社てハ。世張
なるやと公でハ。出けて見ても不便さよ。その日は鈎も

止ゆして。三里の路を凋こと。眉をくゆけて渾家にも出し。
年嵩なまれば姉とよび。お渋を妹といひなるハし。育て
あげたまの年月。誅の児なれは遥にまさり。女のあるさ
何一ツ。孤しからぬおねしが愛明。後もいたあぎよい児を持。
近所の人は鬼やかくと。讃らるくたびよまの親父が。て
ごのゆうようましからう。自由にあらばこの家へおねし
を居て婿をとり。跡をも譲りたいなまど。其処が先
刻もいふ通り。接木の花の詮るなさ。おれも脱く年が

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

より。此月がなければ上人も海ぞ。近いうちに養子にすれど。
今いふ通りのなりしが身れう人。志やによつて此家へ。お海へ
譲らるゝや世間もまなびまた先祖へも不孝にあたる。訳を
志らずに何もしらず。姉を開婦人婿をする親の心あるしい
仕うちと思はまうと。いひこともないなりしの素性委う
いふて笑ものじや。かなくぞ悪くいはんな。その振りこの親
父がなりしはまゝにも猶つて死へ縁づけてやるぞいト始
終を笑て怕せまう。堰くる涙を袖にかけ。霎時詞も

なりしが。せくあげて身をあげ一笑てもぞふせう誅かと
なりはまね此身の素性。ねんのるでございませう祢平
ねんの屋言のとなりしを編して。何がさて面白からう
こしかな証拠もしらにあるトいひつゝとり出せ若深くる
守りもの巾に忘引ねどいて。猿の緒包某の年某の月延
生東令町与吉が女児に子代と書てあるを見せまする
何なれば東令町といふは何処ぞ一向しらぞ人にも問
へど知り人なりし。此ごろきけば上総の国に東令といふ

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

所うあると。始て咲ても右や一昔の。余も立てまゐたが
祿るも。無量なると捐て抑くが。おぬしが実の親ハ此の人
モシ良者で縁さへあつや。あつまぬとのふるのもなけれど。
扱の拵目へつてしてあるれど。ぶんで放々ゆや居も下まれ。
咲が果敢ない身のうへと。ぶんであらうがまの親父が目の
悪いうちハ大丈夫。今までの通り体の親子と。おもふて
居ぬ事下その一付きけば咲とて捨さらに。良しさあまる
身の果敢なさ。幸の親さへ捨てのを。捨ゆて長江年

月を育てまゐる鴇恩ハ。七生の世代捨るとも。報ゆる
ものあらめや。と思へバうましさ有うてさ。何と詞も
なること浮。洞に秩や志がるらん

第四回　弱官の繰言

かゝる所へ足悩が足かゝぐと強きてり「猪俣き女中し
あけまん。急の所用でこありまんト咲より平次ハ立
いでて「ヤア大義く。急の所用の話きハ「ハて所用のすちハ
ぶんドませ様ど。お皷より急のおゐ。只今ぶんに所出

仕あるまうゆ入まれと重役気の作をうけて来ました。
四五日労なぐら今まぐに「いつまも遠知仕る速さ及出
仕いこ ませうとまゐら帰りくゃあげい。ヤ。こまなる代
上下大小まゐう出して下気がせへ。お子代へ学筆抑
あけて出仕のまゐて着衣をかけて稽の稽をあて。吏
提物に着なるとまゐて按へば立あがり。程なく母も改
であらう。淋しからうがおしの間留まして御とお子
代にいひつけ。喘ぎて出てゆく。お子代へ又を見かくりて

元の所へこちかへり。見まべしとへば情なや。そんなら和に
とくさんもかくさんもあるのうん。吏とへ志ゝぎ今までも
真の親といふから。永まくいふたり気性をしたり。今更
何と面目ないとひとり萎るゝ師の業の朝の霜の
中く風情かの。撥の緒の包み紙とりあげ。良に抑
あてよくと泣わらう表に人の音なひ。ハイと回答て強
いづまべ利人ならぬ神系矢又帝。常に往ふ如きを
さにその次をも後ずしてほかくと上り来る。お子代へ

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

洞戸神かくし「まや矢みなさんようお出なさいましてア
此方へ入ら志ゆい「あゆうごいぶお静ごね。こゝはさんへお留
ちうへ「ハイ母と姉は明神さまへ来つて留ちに。お留りて
より魚の仕役でこゝ何と今親父は出仕いてましたから
「おまへひとりお留ち居ろ。ハアそりやア お淋しからう。前は
でも知りまるさんな。天井にゐる鼠の知く乳づかひは
ちいはれど天宮の黒い鼠めが。見ておまへを引てがる
といふ鳴があるから「まあこゝごふいたして私どもは我ト いひ

かけて思ひ出せ。以前の事は乳にかゝり。寒ぐを咎める
矢みな弟が「あゆう大そうに寒ぎるさるね。そのふさぐ
元はといへば。今度の婿がおまへの乳にいられへといふ
ことけざらうトいはまして何せう乳にかゝまど。然あらぬ
魚は「何でございましたと。今度の婿とは何のるすで
ございました。そんなるまはぞんじません「あるほど此ぞんじ
ありましためへ。志ゝぎはお姉しゃそうが。此は此方の親父
さんが。ゴさしの内へお出なさいて。おつちの性矢みな弟を

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

婿に志ていたのお詰。これしが親兄も望む所と。車に
義知の携投して。門お詰はきまりて居る。是といふ
のも日ごろから。信知する神のおかげか。実に是しは
おまへのみを明くれ忘れる障はなく。男と生れて欲
実にはあんな女と連死て。美しさあらばと口へこそ知し
ていたら孫くよくと知ひ出しにあとがはしくも。朝夕
知母もくして。万端世話にある人の女房と称ぐといふ
生れてはいま理も涙ぐと知で知を。却車してはあ居

ましたが。殺ひがうとて鼻紙無に。牛の鋒へじやあい
けれど。親と親とがおぐん泣くに。ちうたはゆめかと
ゆふ心ぞ。うれしくてく何なのもあるよつぎ。殺とふ
これしに引かへて。おまへは何ぞう気がおりく。寒いでゐる
い気にいふね。婿のお詰さるゆへと。これしが悪癖かは
志らないが。大てい外れぬ。白ひごらう孫ト情を含
親のたし。岩木ならねばさなるこゆもかなてやひをかけ
まくもかしこれ父母のまへをかな。身を信むも女子は。

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

と。気ちがいにぶつもうんせざれど。私のうちよりは焦をつる男にかくといひかけられ。嬉し。仕せといへばえよ。いふに言れぬ才の素性。この家の喜びと相澤ある。矣み弟は妹の婿。そを今さうにあんとしやう。ことに焦まつく病ひの床。果は世よあき人の殺よいるとも。あとうちの人と。戯まつく幸の親よりも。粗さらう紀喜親の。恩を仇まやあしぬべきと。私ゑ狗成神逃し。那を結と改めて「お世ゑのよ」も程のある。この仇

あい私ふぜいをそのやうに。いふくくださる刀称の唐にもとぶいませうか。まして貴ゑは近所の評判男ぶりあら器量なら何不足ないよん刀称と。僕そやされるお才れうへどのやうな美くしい。女中とお祝あさらうとも御捞手次第じや ござりません。たゞ人貴ゑのおつしゃるおいとだ。十ヶに一ツ不ん。そうでも此方にかぶどざいません私はエウ一生良人はおろう。どのやうな人にも肌をゆらぬ頑がけ。御免なさまてくださりましトいたれて此方は拘

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

子ぬけかへを親も泣きろく。せいかく殺ひ惜ふさうと。欲くぶ
軍髪も大ぶら川。移ふ舟の筭むれは焚。思掛にあまる意慕
の害。くる我丑さて怒然より。母あつて夫ゑ弟ハ。おまへ代か
侍へぎ川とより。ゑ首楽とさらへて。夏の我ふくむ目の内は
泪を浮めておまへ代が魚。浮ぐとうち添め。意し麻しい
懐かしさ。憶へくて今までの口へも出ざ。乱立ゆも。尽きぬハ
コヒしが武士の意地。かくあるうへハ私をさて。一言いひたい
るかある。否でハあらうが耳我持て。不肖とやかて笑て

小さまと。おまへをやひ初てから。寝る間もコトするまね意の
欲。祀よそのまね縁ならば。たいさ一夜の深外でもと。異教
なくやへばやふわど。矢も楯もたまらべとそ。今日ハいまふか
明日ハいまふと。やつてコヒてもイツヤく。さてが人間第一の情とも。
よしや おまへが沿ひして。親兄弟の目をしのび。一夜二夜の
そひ外よ。くるしきやひを晴をとも。思ふ千里も一跨万一
縡の事ならば。さの身れ咎ハいとの福ど。惹し おまへよ飛
がつれ。婿姿ものよ不義ものよと。人よ指さし笑ハせて。その

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用

うへにまゝ配るも。まゝねせうになるは必定。さらを志ばらく
堪しのび。猪俣夫婦が気に入て。表されての婿姻と。なり
しはばかりで目ひかゝる。其人の親の猪俣成とり。こゝしが親
父伝又七ゆゑ。どふぞ始終は猪俣の。出るゆしてと折くは
情む心の通じてや。親と親しが忘れて。まづ大かたは誓ふ
縁ぐこ。心ばくしの甲斐も川こく。年どろ日どろの身の恥ひ。
ヤレ悔ふたる嫌しやと。まづ完尓とも甘ねさるよ。おやくより
も肝心の妻にあるべき其人の法是なさ。そうして見れば

今までは千変無事の心成くばこれ。仕あげて恥ひも無の
池。今も其人の口従に良人はあらねば男の机を一生ふれ
ねといひなさるが。そもは言ふ事なりけるす。私に定めて人気
まだいひかはしこ分男へ。心中たてくの所望に従。そんな
気分まゝをいまだとも。平ゝて教れば外に二世の約束して
人がわる。たゞ人なれば心の思うよいふことて兼知はあらぬ。
焦まして死ぬなら猪なるに死福と。実敗されてばいつその
る。是ぞ倍まるにもなり合が。アあらといふものぞトうらに

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

なぐらにかきに口説うまし。お子代も元より矢ゑ命ゑ。思ひあり
殘れ捨ゆ永。こゞれよる身の波まくら。かつさ及欲しき慈
公の。なれば狂さう此とは。何といらへんよまちがもなく。ぐ
信ならぬ世の中成。思へば涙さえぐちて。彭ゑんあれして居
たりしが。兎ても角ても古の人に。肌ゆるしてハ畜生にも劣る
この身の不孝不義。さいひ人男のこゝろざし。此身にとり
てハ骨くだけ。渾身を渡る情のおとぞ。想像さへたるな
けれど。堪ゆるハ孝志のぶハ義身ハ礎ゑなるとても。

をば母ゆゑ狂まじと胸中しづめて完命とゆゑ「おう
やしめとハ心也。さりながら貴公も事。よく考へて遂ば
まし神原さゑの四子息さんが。身に捨くりとおつしゆる
おことを。仂なハ身で殘しんとも有がたいともいひゆりハ
ござりませんが。それでさへアイといふまぬ。況あれて。とゞまし
なぐらに否といふ。私が知れて　どのゆうでございませう
それやどまでゑ勢がしゆゑ。お忠しのありがたさ。私でも
忘れハいたしません。どうぞとてものおなさけにハ。私の

十七

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

るへふけつりと。やしなきつてさの門の歩子とおなり
抱だしたる妹のお涉とすゑあぐ。お目かけられて可
愛がりてゆつてやさいまし。とゆても私がおよ男の
あるゆへとお疑ひなそばするゝ。ゝ承い目て仕絶じて
私すけと私が俺めつしい。るがあつたるそのさえ申へ。砕る
ありと寂なりと。そまへあまたの却ゆ。世もいとひへ
どざいませんと。やひ切るないさろ成。安に胸まづ塞
がりて。身ハ空弾のかゝ衣気も魂も裳ぬけくへ

立にちうもなき風情。おなに代もとまをみるゝに男
の心を汲とりてハ。人ちそ志ゝ孫血の涙。義理といふ
字がないならべ。とおもへべいまで形なく。心一ツに千万
の。やひ籠るぞいたへしき。打ゝ帰る母と妹の。愛に
おなに代ハかけ出て。おそゆうお帰りなそだしましたト
例にかゝらぬより形も。やひ裡にあるとそへ。その色和
に彰いると。除へにのまぬ二人が血つき。平生なるぞ
まべ母のお色ハ。心のうちに点ぬて。猶に鰹苦あざんハ

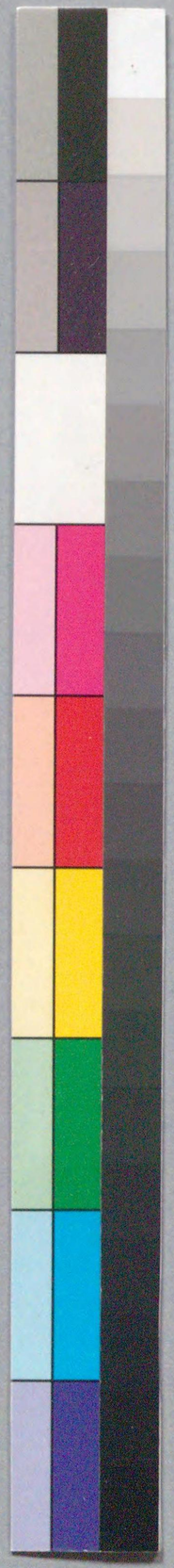
国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用

208
12
681

あるゝね。両個がせうせいてのきりそれよ。アノ兵ゑ弟へ
妹が婿。たゞくあるよ代を遠ざけぜい。お法が若男も
いとをしきと。胸に抱きめてそゝろゝね臭。こゞ紀をのこ
痛むるあるべし

郭花笠初編巻之中　終

国立国会図書館　両個女児郭花笠 4編 208-681
ガラス使用



国立国会図書館　　両個女児郭花笠 4編 208-681

ガラス使用